

中国人教員の視点から見た日本人初級学習者への中国語指導

Endeavors of Chinese education to Japanese learners at the primary stage

張 逸芝

要旨：

本稿では中国語を履修する日本人初級学習者の語学力を向上させる発音指導法を考察した。そして、中国人教員として、異文化コミュニケーションの側面から日本人の学生に対する授業の留意点についても論じた。会話練習時には、単語から「スモールトーク」へと転換することで中国語の発音練習を効果的に行えることを指摘した。更に、「シャドーイング」が中国語の勉強に極めて効果的であることを再確認した。最後には、異文化コミュニケーションの視点から、外国人教員が日本人学生に対して留意すべき事柄について述べた。

Abstract：

This article examines pronunciation teaching methods to improve the Chinese language skills of Japanese students at the primary stage. It also highlights the factors to be considered when teaching Japanese students from an intercultural communication perspective. First, “word pronunciation” and “small-talk practice” are effective in improving the speaking skills of students. Furthermore, “shadowing” is extremely effective in improving oral Chinese in a short time. This article also expounds the need for foreign teachers to pay more attention to Japanese students both during and after class.

キーワード：中国語教育 発音指導 スモールトーク シャドーイング 異文化コミュニケーション

Keywords：Chinese teaching methods; pronunciation teaching practices; small talk; shadowing; intercultural communication

1. はじめに

筆者は昨年（2021年）の10月から長崎短期大学国際コミュニケーションコース一年生の「中国語会話」の授業を担当した。授業は週2回、全15回行なった。履修者8名は、既に受講前に全員中国語の検定試験であるHSK2級に合格していたため、筆者の授業に於いては、HSK3級対策を中心に指導を行なった。その結果、HSK3級を受験した7名が全員合格となった。特筆すべきは、全体的に発音の上達が顕著にみられたことである。一方、「中国語の発音は難しい」、「リスニングは難しい」との声も聞こえた。

また、中国語ネイティブ教員として、日本人の学生とコミュニケーションをはかる際、異文化の違いを感じることも多々あった。そこで、教育現場に於いては、日本人学生の反応によく留意し、学生の気持ちを理解するよう努めながら、注意深く進めることが極めて重要だと感じた。

更に、言語の授業は言語のみを教えるのではないと考えている。異なる言語を学びながら、異なる文化や人に対する考え方についても理解を深め、学んでもらう必要があると言える。このような観点から、中国人ネイティブ教員は日本人の学生にとって、「中国人」や「中国語」との触れ合いの、言わば窓口的存在であり、この意識をもって教育に当たることがとても重要であると考えている。

本稿では、筆者が中国語教育の現場で得た経験をもとに、如何に日本人学生の発音に対する意欲と能力を向

上させ、加えて学生の中国文化に対する理解を深められるかについて考察する。

2. 発音指導を重視

周知の如く、日本人中国語学習者にとっては、中国語の発音は最も困難である。中国語は、同音異義語のみならず、声調によって意味が異なる場合があり、そのため相手に理解してもらえない時や誤解を招いてしまうこともある。また、日本人の学生は集団での行動を好む傾向があるように見受けられる。例えば、筆者のクラスでは、最初に全員で読む時には声を出せるが、いざ各自で発音するとなると、なかなか上手くできない場合がよくある。加えて、昨今の日本に於ける中国語教育は、会話より文法や読解を重視するよう見受けられる。中国語は漢字を使用するため、日本人の学生にとっては意味を推測しやすい。そこで、「発音できなくても読解の点数が高ければ、試験に合格できるだろう」と考える日本人学習者も少なくないように思われる。しかし、こうした考え方はやはり適切ではない。正しい発音を習得できなければ、今後の学習に悪い影響を与えることは明らかである。こうした状況を防ぐためには、各々の学生が積極的に発音練習を行なうことが必須であり、学習に於いて最も重要なポイントであると考えられる。そこで、筆者が授業で行っている指導方法を次に紹介したい。

(a) 授業に於ける一人一人の発音から「スモールトーク」へ

日本人学生はもともと漢字に慣れているため、中国語の読み書きについては比較的有利である。しかし、単語や文法に関して正しい知識を持つ学生であっても、中国語に於けるコミュニケーションに困難を感じているのが現実である。そこで、生の中国語に少しでも多く触れてもらうために、授業中は必ず中国語で学生の名前を呼び、その後に指示を与えるように心がけている。例えば、「XX（学生の名前）、请读一下。（～さん、読んでください）」、「请听一下。（聞いてください）」/「请写一下。（書いてください）」等である。この様な簡単な指示を繰り返し行うことで、学生に中国語の響きに対して新鮮な感覚と緊張感を与えることができ、これが中国語の語感を養う助けになると考えている。

また、授業では学生一人一人の発音を丁寧に指導し、間違えた箇所を指導することが極めて重要だと考える。なぜなら基礎をしっかりと養うことが、その後の中国語能力のレベルアップに大きく影響するからである。一人一人の発音を指導するには時間が必要だが、それだけの価値があると考えられる。また、発音の際には、大きくしっかりと口を開けて発音する様に促すことも大切である。

発音指導はまず単語から始める。次に、その単語を用いての短い会話練習（スモールトーク）へと移る。例えば、まず学生に、「茶」——「绿茶」——「花茶」——「红茶」——「乌龙茶」——「白茶」——「黑茶」など、簡単な単語を覚えさせる。「绿茶」、「花茶」、「红茶」等は初級中国語テキストやHSKによく出でくる単語でもあり、一人一人の発音の正しさをしっかり確認することが重要である。

次に、短い会話練習へと進み、一人一人に質問を行う形で進める。例えば、「主語＋動詞＋目的語＋疑問詞」に関して、その文法的役割や例文を黒板に書き出し復習を行なった上で、生徒と共に音読を行う。次に、掲示した例文をもとに、新しい単語を用いて短い会話文を作る練習を順番に行わせる。

以下の例文は筆者の授業内容からの抜粋である（Aは教師、Bは学生）。

(1) A：你喜欢喝茶 / 绿茶 / 花茶 / 红茶吗？（あなたはお茶・緑茶・花茶・紅茶を飲むことが好きですか）

B：喜欢。 / 不喜欢。（好きです・好きではありません）

(1) を会話した後で、すぐに他の学生に答えを確認する。例えば、

(2) A：他喜欢喝茶 / 绿茶 / 花茶 / 红茶吗？（彼はお茶・緑茶・花茶・紅茶・を飲むことが好きですか）

B：他喜欢喝茶 / 绿茶 / 花茶 / 红茶。他不喜欢喝茶 / 绿茶 / 花茶 / 红茶。（彼はお茶・緑茶・花茶・紅茶・を飲むことが好きです。彼はお茶・緑茶・花茶・紅茶・を飲むことが好きではありません）

これらの練習に於いては、学生一人一人にゆっくり繰り返し発音させる。また、学生が興味を示すようであれば、「乌龙茶（ウーロン茶）」、「白茶（白茶）」、「黑茶（黒茶）」といったように派生させ、それにまつわるお茶の文化も併せて紹介する。また、学生から、「麦茶を飲むのが好き」や「タピオカミルクティーを飲むのが好き」

などの発言がみられる場合には、新たな単語（大麦茶、珍珠奶茶）を提示するなどして、さらに興味を深めてもらう。

こういった日常生活に関する例文をもとにした単語練習の際には、学生がより積極的に練習する様子がみられてたいへん興味深い。つまり、日常に密着した話題ほど、学生の関心度が高まると考えられるのである。

次のステップとして、新たな文法の導入を試みる。例えば、「还是」（～それとも～）を使って、次のような中国語でのスモールトークを行う。

(3) A：你喜欢喝绿茶还是红茶？（あなたは緑茶或いは紅茶を飲むことが好きですか）

B：我喜欢喝绿茶 / 红茶。（私は緑茶・紅茶を飲むのが好きです）

(4) A：她喜欢喝珍珠奶茶还是大麦茶？（彼女はタピオカミルクティーが好きですがそれとも麦茶が好きですか）

B：她喜欢喝珍珠奶茶 / 大麦茶。（彼女はタピオカミルクティー・麦茶を飲むことが好きです）

また、学生の関心度によっては、さらに深く話題を掘り下げる。例えば、タピオカミルクティーはお店で買うのか、或いは自分で作るのか、また日中両国のタピオカミルクティーの値段などに言及し、関心を深めてもらう。こうした学生とのやりとりは極めて重要だと考える。具体的な状況を設定して討論することにより、語感を養い、文法を実際に活かすことができるからである。

そして、会話練習では、テキスト上の内容に限らず、学生自身の生活に関連したことを自由に話すように促す。そして、発音の間違い等があれば、より自然な発音や正しいアクセントで話すために、その場で指摘することがたいへん重要である。

筆者の経験では、このような短い会話練習についての学生の反応は良好であると感じている。特に、話題が自分自身と関連する場合、良好な反応が顕著である。例えば、自分の将来の夢や自分の関心事について、或いは将来の結婚生活など、中国語で積極的に話してくれる生徒もいて印象深く感じられた。これらからはっきり分かることは、教材の定番の「ロールプレイ」よりも、学生にとって身近なことを題材にする方が、いっそう教育効果が高いという点である。こうした、生きた教材を手作りで用いることによって、学生の達成感を高めることができ、ひいては将来もっと中国語で話せるようになりたい、という意欲を高めることができるだろう。但し、「スモールトーク」練習の際には、新しい学習内容のみならず、復習のための時間を取ることも必須である。学生それぞれの許容量を超えないように留意することが重要であると考えられる。

次は以下の (b) について述べる。これが本稿の第二のテーマである。

(b) シャドーリーディングを取り入れる「サブスタディ」

「シャドーリーディング」は一般的に通訳のトレーニングでよく使われる方法である。これも第二外国語の勉強に極めて役に立つものと考えられる。本学の学生は、二年間という限られた期間内で、インターシップや就職活動等も行わなければならない、中国語を学ぶ時間についてはおのずから限界がある。そのため、卒業前に HSK の資格取得を目指す学生は、授業以外に自主的な学習を行うことが必須となる。そこで、学生の自主学習のために、適切な「サブスタディ」を促す必要があると考え、「シャドーリーディング」を実施することとした。方法は以下のとおりである。

授業終了後、その授業で扱った単語の中から重要なものを選んでセンテンスを作成する。それを録音し学生に送る。この録音を用いて、学生が「シャドーリーディング」を行う。学生は、受け取った録音をもとに、次の授業までの間に練習を行う。時に宿題として自ら録音したものを筆者へ提出させる場合もある。このようにして、いわゆる授業外「シャドーリーディング」を学生が自主的に行うように促すのである。この方法は、中国語初級の学習者にとって、時間的制限のある中においても、中国語の発音が綺麗になる一番の近道であると筆者は考えている。次は異文化コミュニケーションに於ける授業の留意点について述べる。

3. 異文化コミュニケーションから見た授業の留意点

現在、国際社会的な交流がますます進む中で、言語の授業に於いても、言語の知識のみを教えればよいわけではない。同時に、異文化への関心と相互理解を深めるための学びを促すことも重要である。外国人の教員で

ある筆者は、成長環境、価値観、文化に於いても、当然ながら日本人の学生とは異なるところがある。そのため、考え方や行動の仕方などにも違いを感じることもある。このような自身の経験からも、とくに言語を学ぶ学生には、共感力や異文化的な理解力を養うことが非常に大切であると考え。なぜなら、近い将来、学生は学んだ中国語を用いて、中国社会に接する可能性があり、その場合、中国の習慣や文化に対する理解と適応力が必要とされるからである。そこで、外国人の教員としては、いつも学生の立場に立ち、正面から向き合う姿勢で、丁寧に授業することを心がけている。

筆者は、中国語を教える際、学生のプライバシーに関する授業内容に注意すべきと考える。例えば、中国語の教科書には、「我的家庭」（我が家の家族構成）という学習内容を含むことがよくある。しかし、こうした内容は、学生のプライバシーを侵す恐れがあると思われる。とくに初級の学習者向けの教科書では、「你家有几口人？」（あなたの家族は何人いますか）という問いがよく出てくる。これを普通のことと考えていた筆者は全員に質問を行なった。ところが、一人の学生に不快感を与えてしまったのである。その学生は、他の生徒と異なる事情を抱えていたのである。ところが、当時それを知らなかった筆者は、通常通り授業を行なってしまった。学生全員に「私の家族」というタイトルを提示し、短い文章を書かせたのである。その学生が恥ずかしそうに書いている姿がとても気がかりだった。そして、その学生が提出した文を読んで、やっと彼の事情を理解でき、筆者は大変反省するに至った。今でもその時の記憶が鮮明に残っている。

この様な体験をして以来、プライバシーに触れる内容については、直接学生に問いかけず、他の話題に転換をはかるよう気を付けている。また、学生と接する際の注意としては、やはり宿題やテスト、成績などを学生に渡す時にも、他の学生の目に触れないような留意が必要である。一方、中国では学生の成績を公開することが多い。これをプライバシーの問題と考えるかどうかは意見が分かれるかもしれないが、少なくとも日本人の学生に対しては、不快感を与えないような気づかいが必要である。これらの事例は両国文化の違いとも言える。

なお、稀に授業中に寝てしまう学生もいるが、このような学生に対しては、軽視したりいきなり叱ったりせず、「大丈夫ですか」などと声をかけたり、黒板に答えや問題などを書かせて眠気を解消させるなど、様々な工夫をすることで、ある程度解決できると思われる。総じて言えば、日本という異国の文化にいる外国人の教員として、日本人の学生の立場や気持ちに寄り添う授業ができていくかを常に意識し、自身の教育現場に於けるコミュニケーションスキルを磨くように心がけている。そして、学生が筆者の授業をとおして、言語能力を磨くと同時に、異文化への関心と理解をいっそう深められる、そうした授業を常に目指したいと考えている。

以上、筆者の経験に基づき、日本人学習者に対する授業に於いて、外国人教師として、特に留意すべき事柄について論じた。引き続き、これまでの経験をいかし、全力で中国語教育を行なっていきたい。